



田端観音入口の案内  
杭と観音堂側面



すくひとりたまひ

田端の観世音

山川こえて はこぶあゆみと



御堂の正面と手入れのゆきわたったお地蔵様



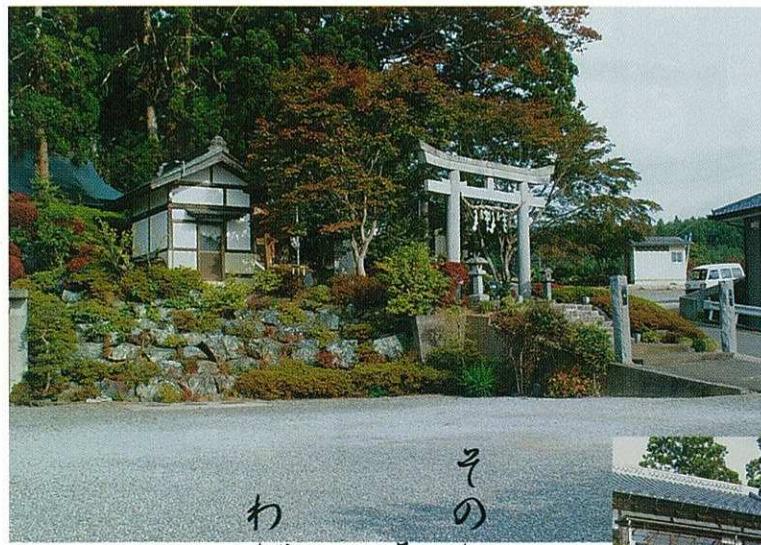
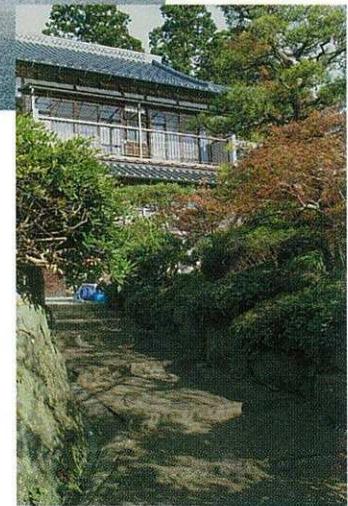
十六筆、十数町歩が記録されています。観音堂は以前、志田家の庭先に建立されていたと申します。

台家は、これまで三度も火災に見舞われたと申します。家の周り何處を掘つても焼け端が出てくるとのこと。本尊仏は一寸二分の懷中仏ですから持ち出されましたが、古史料はすべて灰燼に帰し、往時を語るすべを失いました。

現在地の観音堂は、大正四年（一九一五）地域の方々の浄財により建立されたもので、近年、改築もなされ、観音講は今も定期的に開かれているといいます。

秘仏 千手観音像の縁起として、漁師の網に掛かつたとの説が伝わっています。このような縁起は他にもありました。昔の漁網は荒作りなのに、と不思議にも思いました。しかし、何れは信仰仏の伝えですから、誣索は無用なのです。

熊野神社遠景  
と別当志田家  
及び往時の参  
詣路(下)



そのかみは  
みのりの船に  
さほさして  
わがたつそまと  
ここを  
みくまの

熊野神社内に觀音堂があること  
自体不思議に思っていましたが、  
熊野信仰の本宮である那智 熊野  
宮の本尊が聖觀音と知りました。

ここ熊野神社でも、釈迦如來  
像・役行者像・不動明王像ほか懸  
仏十九体があり、その中に觀音像  
もあって、これを札所の本尊とし  
ていたときもあったとのこと。実  
は当神社は、神仏・神器を満載し  
た一艘の漂着無人船を縁起として



觀音堂と本尊仏聖觀音立像



風害で半分に裂かれた三面椿

いるのです。

鎌倉時代、松島寺(瑞巖寺)が北

条時頼の征討に会い、僧侶多数、  
福浦島にこもって熊野權現を勧請  
し抵抗しましたが逆いきれず、遂  
に、ご神体および神器・神具一切  
を船に積んで流したとの記録があ  
り; それが黒潮にのって、当地  
へ漂流したのではと考えられています。  
当熊野神社には、今もこの  
神器等數十点が社宝として保存さ  
れています。宝物の太鼓胴の中には、  
神龜(じんぐい)（七二四~一九）の年号が書  
かれたものもあつたとのことです。

また、ここの中には、三方に  
蔽椿の古木があり、これを「三面  
椿」として大事にしてきましたが、  
一本は枯れ、残りは天然記念物の  
指定を受けました。しかし、残念  
ながら、近年の風害で半分を失つ  
ています。

今まで  
またのちのよも  
ひたすらに  
たのみをかけて  
のりにこたてに



小館觀音への登り口

ここ小館山は、泊漁港の北端に  
にせり寄った小さな岩山で、城跡  
の南端にあたります。

小館觀音堂は小館山の一番のふ  
もと寄りで、岩頭には不動明王・  
愛宕神社の祠がありました。

安永風土記によると、勧請  
は宝永（一七〇四）一二年代で「当  
村志田屋敷 御百姓仲兵衛」とあ  
り、境内は南北十五間、東西十三  
間で、「二堂 南向き三間四面、本



### 尊 三十三觀音何茂木仏立像 御

長七寸一分 地主 真言宗海雲山  
智福院」など書かれています。

智福院は藩政時代までは氣仙町  
金剛寺の末寺として当村の祈祷寺  
でしたが、明治になつて維持が困  
難となり、平泉に移転したといい

ます。現在の平泉町竜玉寺がそれ  
に当たること。

小館觀音堂は、昭和四十年（一九  
六五）地元民の寄付により、二間四

面の規模で再建しました。裏手山  
頭の不動明王・愛宕神社とともに  
この小館山は、古碑等も並べられ、  
近代化された周りのただ中にあつ  
て、ひときわ靈地の趣を保持され  
ています。

地元では「魚鹽觀音」とか「鯨  
觀音」とも呼ばれ、漁業を守護す  
る觀音として崇敬され、現在、  
「仁位屋」熊谷家により管掌され  
ています。

ながきよの  
くるしきことと思へかし  
よをおもふゆへ  
ここにたつかね



田東觀音堂登り口と御詠歌碑

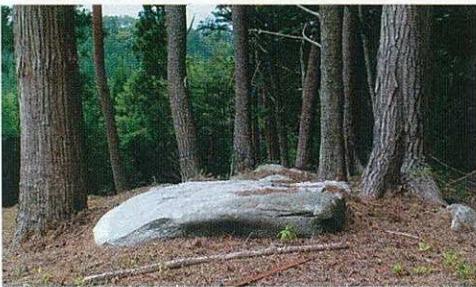


田東山は昔「辰金山」と書かれていたと言います。小友浦の角に「辰が根」と名付けた漁場があり、ここで漁網と共に上がってきたのがご本尊の聖觀音像だったと申します。その時、辰金山の山頂が光ったとあって、そこへ觀音堂を建立し、女人禁制の山にしたというのです。ご本尊は、一寸八分の念持仏、銅に鍍金を施したもので、もちろん秘仏となっています。

辰金山善性寺は、小友村史では、



堂々と新装なった御堂



修驗者瞑想の畳石



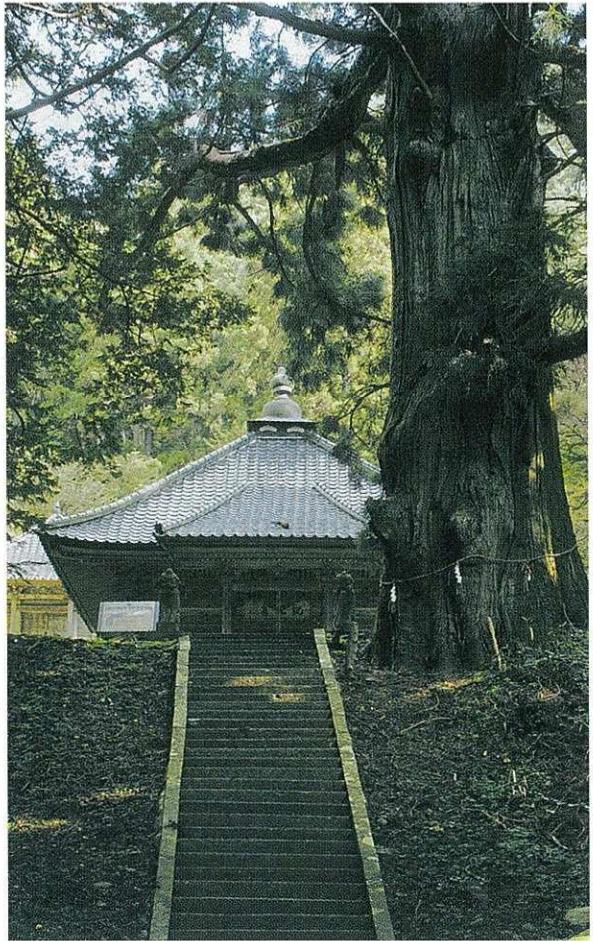
靈地然たる石物配置

もと龍金山大光寺と称し、矢の浦にあつたといい、安永風土記には、寛永二年（一六二五）宥範法印の開山で、本山は今泉村金剛寺と記されています。檀家はなく、田東五部落を中心とした信徒のみで維持されてきたといいます。大正の中頃からは無住に甘んじていると申しますが、近年有志の働きで五軒の檀家をつくられたとのことです。

田東觀音の初舞台となつた「小友浦」は、戦後、干拓地として陸地に変わり、もはや、遠い過去の風景となっていますが、田東觀音堂は、瀬戸瓦で吹き替えられ、今年（二〇〇四）十七年目に当たる御開帳が行われました。

田東山の頂は、現在、鬱蒼としていた老木が整理され、真言の御本尊、大日如来と結ぶ觀音堂らしい明るさを取り戻しています。裏手にあつた、修驗者瞑想の石畳も、一層、慈悲の温かみを蓄えているかに感じられました。





松風も  
みのりなるらん  
常膳寺  
仏のつかひ  
たのもしきかな



志山凡俊の書になる造宮碑

常膳寺観音堂は、前述したように氣仙三觀音のひとつで、早虎なる鬼を葬ったという田村麻呂伝説の、史実と絡んだ莊嚴な地域遺産です。

早虎は、白山の岩窟にこもり、猪川の金犬や矢作の熊井と共に抵抗し、「正林」と呼ばれる所で討ち取られたといいます。「早虎屋敷」といった地名も残っているとか。当時の、誇るに足る武器「蕨手刀」も出土していました。



観音堂正面



本堂側面



常膳寺は、山号を「鶏頭山」といい、創始年代は不明ながら、観世音縁起の中に「寿永元年（一一八〇）とつがる唯一の生き証人、証言を得られないのが無念です。

田村麻呂伝説を史実としてイメージさせるものに、巨大な姥杉がありました。大同年間（一一〇六～一〇八〇）とつがる唯一の生き証人、証言を得られないのが無念です。

また、堂宇に納められている秘仏十一面觀音像は、制作年代を鎌倉時代とする説が有力と言われますが、伝説の事件から四百年後、丈二メートルに及ぶ木彫をここに刻ませたもの、そして、千二百年もの変遷を越えて、この姥杉を保護継承してきた住民の精神性の中にも、なみなみならない史実を感じ取ることができそうな気がしました。



入口側からの御堂



大乘妙典六十六部供養碑

立山觀音堂は、「立山」と呼ばれるこの近くの旧家、大和田家の屋号からきた名称です。本尊、聖観音像と脇仏の三体が祀られています。

この三体仏は、天明（二七八一八九）のころ、大和田家の先祖、佐五衛門という方が奥さんの発想で祀られたといいます。その頃は、凶歳飢饉に加え、疫病の蔓延で苦しんだ時代ですから、おそらくは、そうした中での發案だったのです。

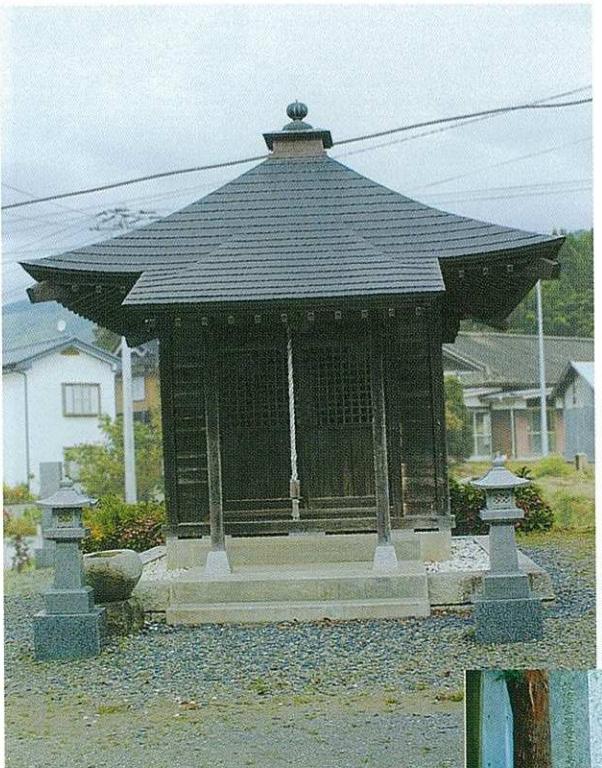
ありがたや

かれたる木にも花咲きて  
深きつかいを

たつやまのたう  
(堂)

よう。

安永風土記には、「本尊 聖觀音ニ御座候 何像ニマカリナリ候ヤ 当時 御本尊生体御座ナク候右ハ当郡巡礼三十三番の札所二十八番ニ御座候事」と記されてあります。



觀音堂正面



境内には、かつて庫裡もあり、津波や火災時、被災者の仮屋になっていたと申します。また、正徳四年（一七一四）銘の「大乘妙典六十六部供養碑」もあり、寛政四年（一七九二）普門寺堂宇再建を機として、若衆組の「念佛講」が組織されたという記録もあると言いますが、その名残りは現在に続いていました。

今の大和田家の御堂は、昭和六十三年（一九八九）に建て替えられたものです。三体仏も健在、小スペースとはいえ、地域の頃合いの場を得て、大きな癒しの広場になっていると思





普門寺参詣道



普門寺指道碑



本堂

慶応三年火災で  
焼失した楼門の  
礎石

宝物を戴いて帰りましたが、その

中に觀音菩薩像があつてこれを本尊とし、また、「普門品」なる教典の「普門」の二字を受けて「普門寺」とされたといいます。

しかし、古刹の多くがそうであるように、その後長い衰退期があつて、中興の祖になつたのは、稗貫郡石鳥谷町の大興寺十世如幻充察和尚で、ここから曹洞宗となりました。中興開基は、浜田城主千葉中務大輔宗綱といわれ、永正元年（一五〇四）寺領を給して現在地に再建させたのです。

普門寺は天正一九年（一五六二）と慶応三年（一八六七）の二回火災に見舞われました。堂宇、古文書の大部 分は焼失しましたが、前記の宝物は今も保存されています。

海岸山普門寺は、産金郷氣仙の豪族、金右馬之助 阿部定俊による仁治二年（一二四二）の開基といわれています。海岸山なる山号は、当時、開山場所が「地竹沢」地内の海岸だったことに起因しているといいます。

開山に当たつたのは記外和尚といい、宋（中國）の國へ三度も渡つ

て修行され、大元宋帝より五種の



岩寺、今泉の龍泉寺、三陸町綾里の長林寺、米崎町勝木田の松月寺、気仙沼市大島の西光寺等を開きました。

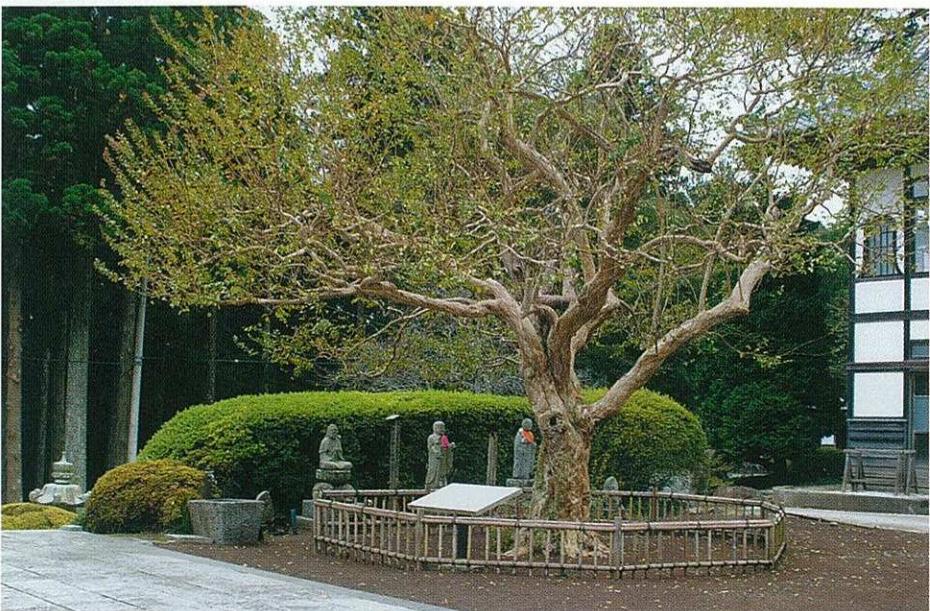
現在ここに見られる本堂は明治十年（一八七七）の再建で、庫裏は明治五年、衆寮は昭和一十八年（一九五四）とのこと。現存する建造物の中で最も古いものとしては、享保十年（一七三五）に建立された代門のみということでした。

しかし、参道門前には、当山中興の祖 如幻充察和尚 御手植えの杉が周囲九メートルの巨木となつて並立し、他にも樹齢三百数十年の姥杉が参道両側に林立しています。

御本尊 聖觀音菩薩像および文化年間（一八〇四～一八）建立の三重の塔は、県の有形文化財の指定をうけ、また、境内の見事なサルスベリの樹齢300年といわれるサルスベリは、その見事な姿態と若々しさで参詣者に親しまれています。

りは、市の指定する天然記念物となっています。

そのほかにも、文政元年（一八一八）作の大仏や仁王尊像などあり、史的文化に親しむ気仙の代表的な伽藍として、各界に當時利用され、奥羽三十三観音の二十九番札所にも選定されています。



樹齢300年といわれるサルスベリは、その見事な姿態と若々しさで参詣者に親しまれています。



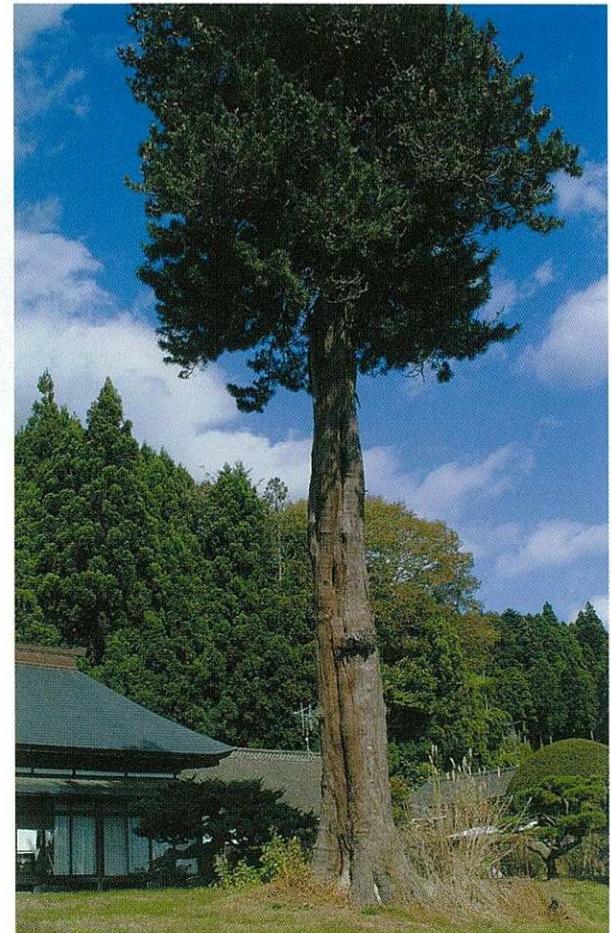
氣仙大工の妙技、扇タルキと向拝の重厚なデザイン



も選定されています。



三重の塔・仁王堂・大仏



圧倒される楨の大木

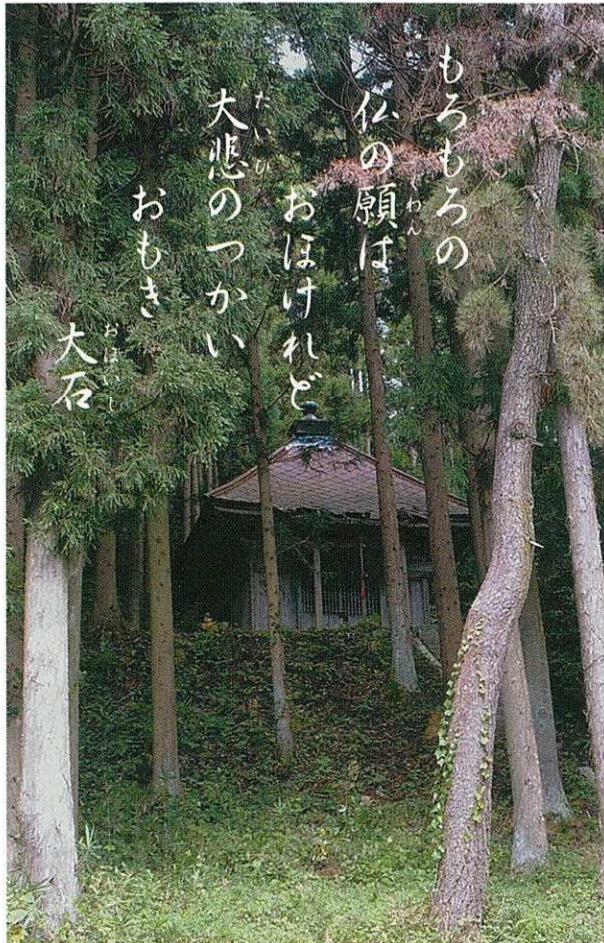


石垣の上の案内塔



大石觀音堂の別当を務めておられるのは、旧家「矢作家」ですが、この家の先祖は下総の国（千葉県）矢作郷の生まれといわれます。葛西宗家の臣で、氣仙矢作村一帯を本領とする鶴崎城にあり「千葉玄蕃」で知られています。それが、葛西没落の後は「矢作玄蕃」として気仙三十六騎の旗頭を勤めておりります。初め「千葉姓」であるものが、領地を返上した際「矢作姓」に変わったのかも知れません。いずれ別当 矢作家は館主の子孫で、大石觀音堂はその持仏堂だったのでしょう。

杉林の中の觀音堂。  
薄暗い靈気の中に、悠久の時のながれを感じさせられるものがありました。

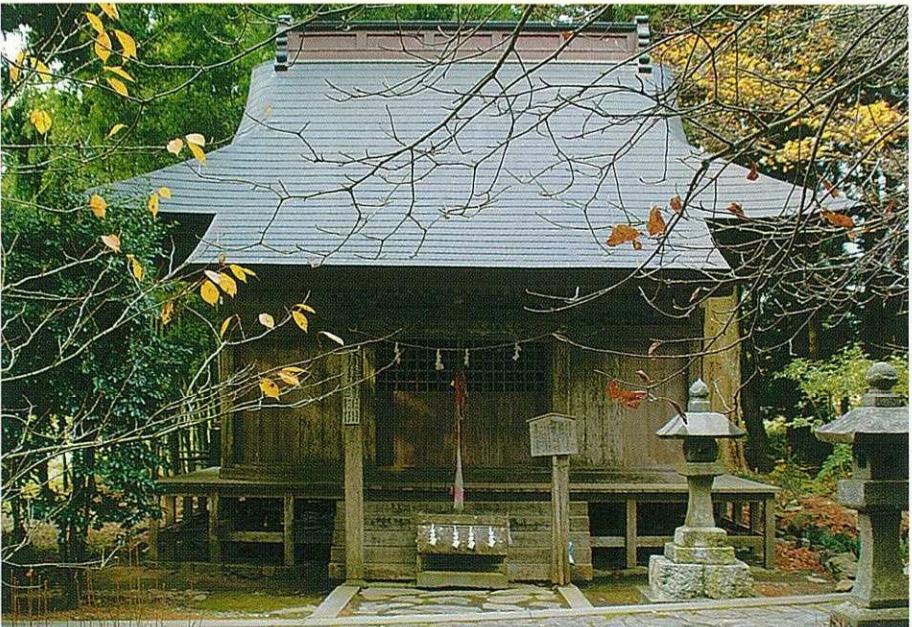


もろもろの  
仏の願ば  
おほけれど  
おもき  
大石

現在の御堂は裏山の斜面、杉林の中にある、一間四面の規模で、觀音像もその中に祀られ、一メートルほど厨子の中に納められてあるとのこと。八月盆の十七日が縁日で、その前後の夜ごもりも行われておられるといいます。

矢作家の庭園は、その広さと古い植木などの構えによって、往時の姿を偲ばせてくれます。ことに、垂直に伸びた高野楨の大木は、城主の威厳を今に顯示するかのように眺められました。また、御堂のある裏山の霊氣も、どこかそこはかとない靈氣を漂わしてい





気仙三十三観音三十一番札所



歴暦の重みを感じさせる石垣



「氷上本地」とは、氷上山頂に置かれた神仏混交の靈地をいいます。氣仙風土草では、「氷上」は「日神」とも書き、ここに大權現が祀られて、氣仙の總鎮守だったと書かれ、また、丸い板に本地仏三尊の影を残したものがあつたとも記されているといいます。

更に本地堂について、「正徳年中（一七一一年）登米郡米谷・高泉家より、浜田村普門寺へ弥陀・薬師・觀音の木像が寄付され、享

### つみきえて

登るうれし ひのかみの

大悲のつかい

たのもしきかな

奥行きの深さを見せる本殿



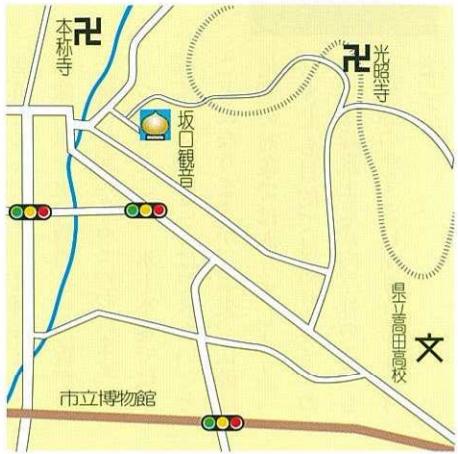
整然たるマス組



保年間（二七一六年～三二六年）氷上山に納め本地仏となし、この地に堂を創立して安置す」とも記録されています。

ところが、寛延三年（二七五年）には、高田村出身で会津若松の宗英寺十世、心淨和尚より唐銅仏二体を氷上三社本地仏として寄進があり、これを奉納すべく山頂に向かつたところ、俄に風雨激しくなつて登ることができず、ついに村人神たりと恐れて奉納を断念、後に横田村の長徳寺に懇願され享和二年（一八〇二）唐銅仏三体と木像三尊を永代納めとした旨が氷上神社社記にあるといわれます。

つまりところ、氷上本地では本尊仏を押することはできないことになりますが、本来、仏像は信仰の対象ではあります。が、必ずしも目的ではありませんので、靈峰氷上と式内三社のみでも十分心のすすぎになりうると悟りました。



おのづから  
鈴のひびきに  
ねむりも  
さめで  
ねがう  
のちの世  
煩惱の



御本尊聖觀音立像

「坂口觀音」という名は、現在、別当寺である光照寺の登り口にあるところからついた呼称といわれます。以前、この三十三觀音が選定された享保年間には「千福寺観音」だったとのこと。

鶏養山千福寺は、村寺として慶長十年（一六〇六）今泉 金剛寺によって開基されたといいます。場所は本丸公園入り口付近で、真言の寺として聖觀音像、不動明王像、牛頭天王像ほか各種の仏像を多数

祀られていたと申しますが、觀音信仰の普及にあわせてか、ここに觀音堂を建立して安置したものといいます。千福寺は明治五年（一八七二）廃寺となりました。

御本尊の聖觀音像は、木彫ながらしつかりしたお姿が維持されています。前に供えられた赤い小袋は、お産などの際、ここからひとつお借りして、お礼参りに一個加えてお供えする習わしとか。

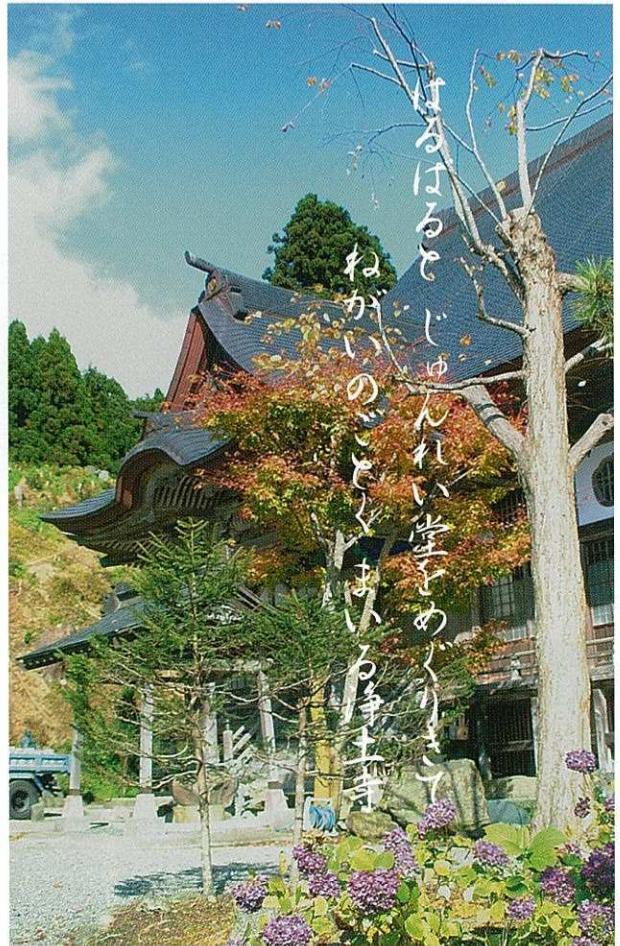
なお、無量山光照寺には、氣仙三十三觀音を選定された佐々木三郎左衛門のお墓があることを知りました。また、当地、鮭川驛援仲裁の英傑、村上道慶もここに眠つておられます。



萬靈等ほかの寄せ碑



坂口觀音堂



寛文（1661～73）の古碑。  
浄土寺は、気仙の中でも古碑が多いことで知られています。



氣仙三十三觀音の靈場巡り納めの札所は浄土寺です。本堂は桃山様式の建造物で知られていますが、創始された当初は天台宗で、寺伝によりますと、平泉文化の隆盛を支えた氣仙地方の産金地、矢作村雪沢の地にあって「奥州の高野山」を擬すべく着手されたといいます。正式の開基は天正二年（一五七四）「厭離山欣求院浄土寺」と称し、開基者は、今泉のもと金山師と言わ



れる白井囚獄です。この方は氣仙三十六騎の一員で白石の陣に出陣し、文禄元年（一五九〇）から十二年間大肝人を勤めています。雪沢金山の袁微や葛西の没落などで、浄土寺は支院と共に一時竹駒に移り、元禄十二年（一六九九）現在地に落ち着きました。今の本堂は、棟札の発見により寛政八年（一七九六）の再建と分かりました。

札納め堂ともなる観音堂には、かつては三十三体の観音像が安置されていたと申しますが、永い歳月の自然破損により、観音像数体と、古い不動明王を残すのみとなっていました。

これを憂い、当寺の先住、慶春和尚の発願によりまして、三十三身像の新規制作計画が立てられ、十八体まで進んでおられます。しかし、現在は中断を余儀なくされ、市販立像仏を加えて祭壇を作られておられます。

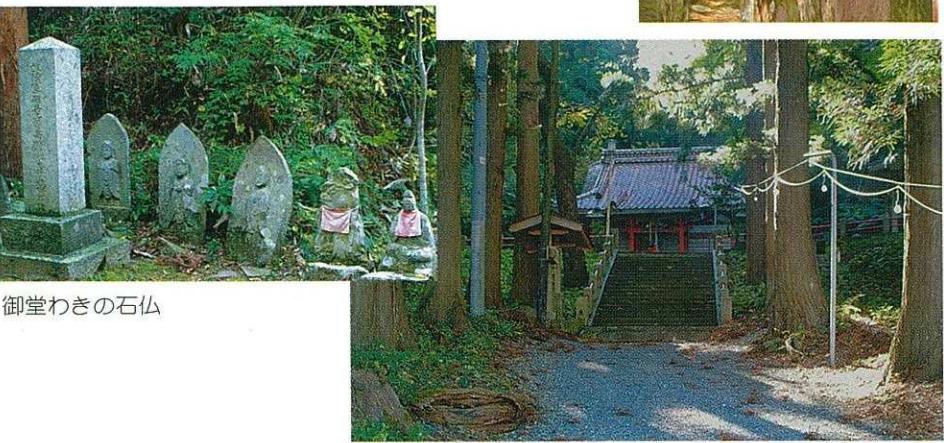
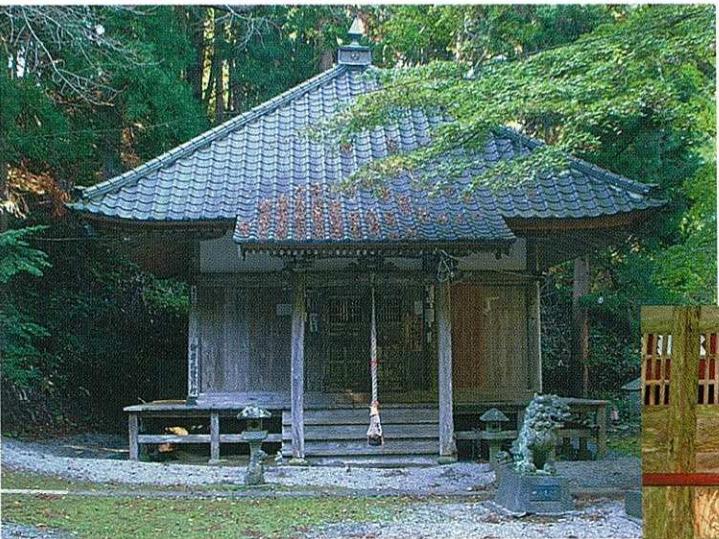


觀音堂全貌





宮城県名取の老女寄進



御堂わきの石仏



尾崎神社は寛永二年（一六二五）火災に見舞われ、古文書を焼失、由緒も沿革も明らかではありませんが、伝えて延暦二年（七八三）の創立と言われ、養和元年（一一八二）藤原秀衡公より社領として二百石を与えられ、その後の葛西氏もこれを認めて氣仙の総鎮守としていました。伊達公も巡見の際など参拝しているとの記録もあります。

封内風土記に「尾崎大明神」として、「保延元年（一二三五）名取の老女勧請」とありますが、祭神は不明ということです。しかし、これが奥州二十八番の札所なのです。



西国三十三觀音 線彫り絵(部分)

登り口

れましたといいます。

施主となられた方は、遠野附馬牛出身の千葉虎之助という人。昭和の初めこの地に滞在して、毎日お風呂を沸かしたりしていましたが、やがて川石を運び上げ、連日鑿の音を響かせていましたと申します。完成後は、

地元有志で建立開眼させた觀音像

